

〔塵袋〕一陸奥國ヲミチノクニト云フハムツノオクト云フベキヲ、アシクミテミチノクトハ云ヒナセル歟、如何、

ツ子ニハサゾオモヒナラハシタレド、六ト云フ所ノカラニハソレガオクトモ云ヒニクキニヤ、其上ヘ、日本紀ニハ道奥トカキテ、ミチノクトヨメリ、陸ハクガノミチト云フ心ニテ、ミチ東ノオクト云ハムトニヤ、東山道ノ國ナレバ、ナドカクガノミチトモイハザラン、

〔倭訓栞前編三十〕みちのく 萬葉集にみゆ、陸奥をいふ、倭名抄にはみちのおくと見えたる、國號の義字の如し、俗にみちのくに又むつ。のくにといふ、歌にはよむ事なし、續紀に陸奥國上治郡と、今此郡なし、

〔古事記傳二十〕道奥、書紀齊明卷にも道奥と作又陸道奥とも作れたり、萬葉十四十八に、美知能久と見ゆ、能に於の韻ある故に、和名抄には、陸奥三乃於久とあり、古今集顯注に云、陸奥國と書て、みはてみちのおくとよむを略して、みちのくとも書り、世俗にみちのくにと申すは歌の詞に非ず、ましてむつの國と申す、無下のことなり、陸と云文字をもつと云ばと思へり、陸をばみちとよむなり、歌に信に此國名の美知を卒都と訛れるは、是よりぞまざつらむ、奥は口に對云、稱にて、道口道後の後に同じ京より行に初の地を道口と云、終を後とも奥とも云り、此國は東北の極に在て、實に道の奥なり、筑紫にても、大隅薩摩を奥の國と云ること、檜垣家集に見ゆ、又陸奥國にても、黒川郡よる奥郡と云、大同五年の官符に見えたり、源氏物語若菜卷には、播磨國內にて、此國よることあり、

〔玉勝間五〕みちの國 むつ

陸奥は歌にもよむごとく、美知乃久にて、和名抄には美知乃於久とありて、道之奥といふ意の名なれば、下に國とそへていふ時は、美知乃久乃久爾なり、然るを中昔の物語書などには、みちの國とのみいへるは、みちのくにといひては、乃久といふことの重なりて、わづらはしきまゝに、乃久をはぶきていひならへるなるべし、さるを又後にはむつの國といふは、みちの國を訛れる